

## PB-152

### 震災を想定した手術室災害訓練を実施して

高山赤十字病院 手術室

○森前 由美、道洞 淳子

【はじめに】当院では平成22年より年1回の大規模災害訓練を実施している。手術室において過去に机上シミュレーションを実施したが、手術室主体の災害訓練は実施したことがなかった。今回、院内大規模災害訓練に合わせシナリオを作成し、災害訓練を実施したのでここに報告する。

【方法】事前に3パターンのシナリオを作成。シナリオ1、腰椎麻酔下虫垂切除術予定。手術開始前に地震発生。手術中止とし病棟へ帰室する。シナリオ2、全身麻酔下胃切除術施行。腹膜縫合中に地震発生。皮膚縫合まで行い病棟へ帰室する。シナリオ3、入院中の妊婦。震災発生後、分娩進行中に児心音低下。分娩室で帝王切開術を施行。シナリオ毎に配役を決め、役割別行動表を作成した。訓練後、手術室スタッフを対象としたアンケートを実施。

【結果・考察】当日17時、院内の訓練放送が流れると同時に、シナリオ1・2による術中地震発生を想定した訓練を実施した。術中起こる災害に関しては、手術を担当している医師・看護師同士はもちろん、リーダー看護師・フリー看護師との連携が重要であると感じた。また、患者への声かけ・タッチングなど状況に応じた配慮も重要で、シナリオ3の訓練に対しては、患者を担架で搬送する猶予がなく、手術室スタッフが必要な手術物品を持参し、分娩台に乗ったまま手術を行う設定で実施した。病棟での緊急帝王切開が可能ということが検証でき、役割ごとの動きが共有できた。今後は夜間・休日時に被災した場合の対応、自家発電に切り替わらない場合など想定外に備えての訓練が必要である。アンケート結果より、「災害時の動きがイメージできた」「担架の使用方が詳しく分かった」「観察項目・確認項目が分かった」という意見が聞かれた。年1回の訓練にとどまらず、今後も継続して術中を想定した災害訓練を実施していくことが必要である。

## PB-154

### 救急外来におけるRRS要請基準の試験的運用による妥当性の検証

武蔵野赤十字病院 救命救急センター 救急外来

○小林 圭子、西塔 依久美

【背景と目的】A病院では、院内急変対応能力向上を目的として様々な取り組みを行っている。その一つとして、RRSの院内導入に向け、Bellomoらの研究をもとに作成した「担当医・当直医への患者診察要請基準（以下、RRS要請基準）」が、A病院の患者急変対応を迅速に行う上で妥当性があるかを検証するために、救急外来で試験的運用を行った。

【対象・方法】調査期間：2012年12月28日～2013年3月31日。調査対象・方法：「RRS要請基準」に該当する救急外来受診患者でRRS対応を行った患者を情報用紙から抽出。a)RRSの要請件数 b)来院手段 c)要請後の転帰 d)要請基準の該当項目について調査。倫理的配慮：データは個人特定できないよう配慮した。

【結果】a)RRS要請件数：18件 b)来院手段：救急車6件（トリアージ区分内訳：蘇生5件、緊急1件）Walk in 12件（トリアージ区分内訳：蘇生5件、緊急6件、準緊急1件）c)要請後の転帰：unit系入院9件、一般病棟入院4件、観察室後帰宅2件 d)要請基準の該当項目：呼吸の問題（SpO2含む）12件、意識レベル4件、血圧低下1件、ACS症状2件、看護師の懸念4件以上の結果より、RRS養成基準は患者の緊急度を的確に示す基準であり、さらには、入院治療を必要とする緊急病態と重症度を示す基準になっている。

【考察・課題】様々な緊急度区分に分類される患者が多数来院する救急外来においてRRS要請基準の試験的運用を行った結果、緊急度が高く、入院治療が必要な緊急病態の患者が選別される事がわかった。つまりRRS要請基準は、緊急病態の患者により迅速で適切な診察へとつなげることでできる基準であることが示唆された。今後はRRSの周知徹底を継続するとともに、RRS運用で生じた問題などはタイムリーに関係各所と協議できるようにして、院内全体へ実用化できるシステムとなるよう改善していく必要がある。

## PB-153

### 災害時初期行動アクションカードおよび安静度板作成についての活動報告

武蔵野赤十字病院 看護部

○松岡 英祐、木村 陽子、谷村 文

【はじめに】自衛消防訓練が院内で毎年行われているが、呼吸器科が主である当病棟において具体策が検討されておらず、初期行動や避難方法が分からない等、スタッフの防災意識も低かった。平成24年度の訓練において、当病棟が火災発生現場になったことを契機に浮き彫りになった上記の問題点について検討した。具体的な対策として、災害時初期行動アクションカード（以後アクションカードとする）および安静度板を作成し、活用した。その取り組みを報告する。

【取り組みの実際】取り組みの目標を『病棟スタッフが防災意識を持ち、災害時の行動が取れる。または、災害時の行動が認識出来る』とした。

具体的な対策として、『アクションカードの作成』と『安静度板の作成』を行った。アクションカードは、役割行動を分かりやすくするために3項目程度の重要な点のみを記載した。病棟における特有の患者の移送については診療部長と相談し、移送方法を記載した。役割毎に色を分け名称を大きく表示したカードをパウチ化し常時携帯できるようにし、勤務開始時に役割を確認し装着させた。安静度板は、酸素使用患者が避難先で投与量が把握されるよう量を表示した。移送手段は選択できる表示とし、記入の簡素化を図った。常時ベッドサイドに表示し、災害時には簡便に持ち移せるよう紐を太くした。

【取り組み後の結果】スタッフが当日の役割を認識することで、日々の防災意識を持つきっかけとなっている。防災訓練時、安静度板がある事で移送方法や避難先での酸素投与をわかりやすくする事で、避難させやすいという意見があり、取り組み目標は達成できた。

【今後の課題】使用開始から日が経つ事で意識が低くなっているため、定期的に意識づけを行い、用具の活用を徹底し防災意識を日々高めていく。

## PB-155

### 急変予期対応向上委員会の活動報告 ～急変対応ニュースを発行して～

武蔵野赤十字病院 看護部 内科外来

○中村 秀子

【取り組みの背景と目的】急変予期対応向上委員会は、急変時よりもより急変を予期した対応の医療の質の向上に貢献するために取り組んでいる。当院ではH16年度より全職員を対象にBLS講習会を行い2年毎に事後講習をしているが、急変に関する情報を共有する機会が少ない現状があり院内に発信する必要性を感じていた。その一つとして広報活動を行い効果や反響を得たのでここに報告する。

【取り組みの実際】「急変対応ニュース」として全職員が閲覧できる院内電子掲示板を利用しH25年度に計6回発行した。明確な視点や印象のある写真、読みやすさに重点を置いた構成や編集に工夫した。エスカレーター転落事故症例を基にしたシミュレーション講習会や院外の急変予期対応研修、院内BLS講習会など部署内ばかりでなく、看護部全体で取り組まれている教育の提供を紹介した。ここではチームダイナミクスが機能する様子や、本番さながらの模擬急変場面に対応する様子、ファシリテーターと参加者の生き生きとした表情を取り上げた。また特殊環境のMRI室での急変対応やAED新機種導入にあたり使用上の注意喚起など、二次事故の危険性や安全対策を紹介した。さらに特殊な場所でのBLSを経験し蘇生に奏功した症例では、当事者の心理描写により緊迫感や心の感動を伝えた。ニュース発行後、部署内講習会などの問い合わせや自分も同じ体験をして共感した等の反響があった。過日、外来患者のエスカレーター事故が発生した際に二次事故もなく適切な対応が行えたという効果も見られた。

【今後の課題】ニュースは読み手の関心や興味をそそるものでなければならない。当活動を通じ興味を持ったテーマや急変時に役立つ企画で、魅力あふれるニュースをさらに発信していきたい。また周りからの意見や急変対応時のデータにより客観的な評価をしていく必要がある。